

名所 めいしよたん 圖

江戸後期の旅行ガイド

1996.8.6-10.20

會 の

世界

徳島市 徳島藩 徳島城
 徳島県 徳島藩 徳島城
 徳島県 徳島藩 徳島城
 徳島県 徳島藩 徳島城
 徳島県 徳島藩 徳島城

徳島藩 徳島藩 徳島藩
 徳島藩 徳島藩 徳島藩
 徳島藩 徳島藩 徳島藩
 徳島藩 徳島藩 徳島藩
 徳島藩 徳島藩 徳島藩
 徳島藩 徳島藩 徳島藩



展示図録目録用

文化の森総合公園

もんじょかん



徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山 TEL (0886) 68-3700

江戸時代の庶民の最も大きな楽しみのひとつが旅行でした。初めての場所を訪れたとき必ずほしいのが気の利いた旅行ガイドでしょう。現在のように写真入りのガイドブックが生まれる以前、実景描写の挿し絵と平易な解説で爆発的に普及したのが江戸後期に生まれた「名所図会」です。

「名所図会」の名は、秋里籬島著・竹原春朝斎画で安永九年（一七八〇）に作られた『都名所図会』六卷十一冊で初めて使われました。この本は売れ行きがよく、この後さまざま地域や目的の「名所図会」が生まれました。

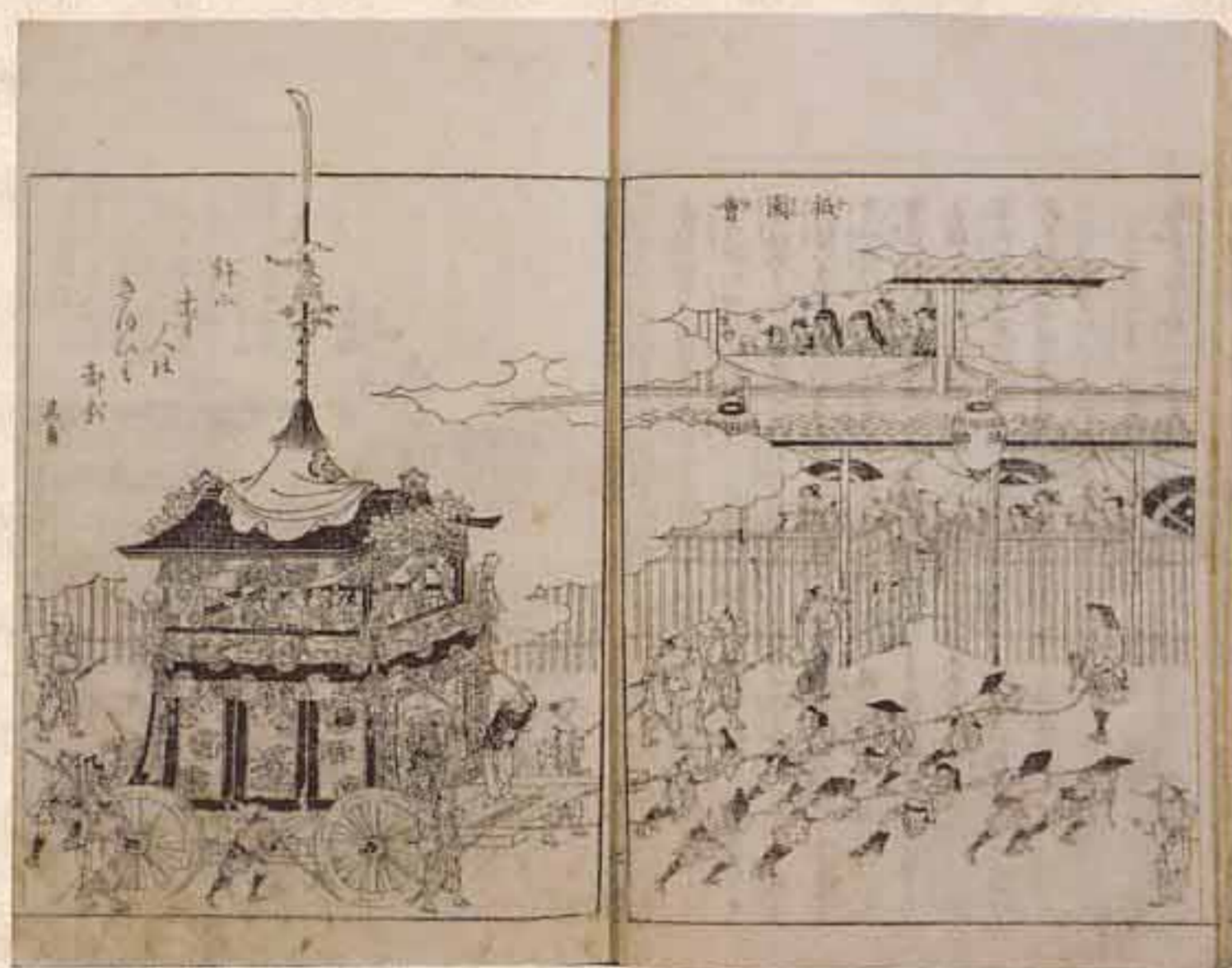
名所とは、『万葉集』をはじめとする歌集にでてくる歌枕としての地名を意味し「などころ」と呼ばれていました。江戸時代になると、歌枕の地名を集めた本来の「名所記」から寺社・旧跡・風俗などを織り込んだ文芸的な旅行記へとかわっていき、さらに「名所図会」へと完成されていきました。

名所図会の特徴は、客観的な記述、地理的案内的な挿し絵にあります。細かな部分で間違いがないことはありませんが、少なくとも取材を行い誇張を押さえた記述をして実際に旅行者の目を通して確認してもらおうことを主眼に置いて作られています。また、二点目として故事の記載があげられます。歴史的な事件である合戦や、その場所に関わる逸話を記すことで旅情をかき立てたのです。さらに三点目としては、その地域の風俗を写していることがあげられます。峠の茶店や、蛸狩りや魚漁の様子などその土地の風俗を記しています。さらにその編集も、国単位の名所図会ならば郡別にしたり、街道や巡拝の道中を示す名所図会ならば行程順に名所・旧跡を配するなど工夫されていました。

これらの名所図会は、単に旅のガイドブックとしてだけでなく、他の地域の地誌を知る扉でもあったと思われれます。中には、日本中の特徴のある山ばかりを图示した『日本名山図会』や、庶民の旅行の対象にはならなかったはずの中国の名所図会『唐土名勝図会』なども発刊されており、江戸時代後期の博覧的な知識への欲求に高度な木版印刷が結びついて生まれたものだといえるでしょう。

それらの記載は現在でもそのころの風俗などを知る格好の材料になっています。

名所図会と江戸後期の旅



都名所図会「祇園祭」

西野・多田家に残された「名所記」「名所図会」の一覧

標 題	年代(初版年)	冊 数	著 者	画	制作 対象	史料番号
有馬湯山道記	宝永8年 1711	1巻1冊	貝原益軒		京都から有馬温泉	C75
東路之記	正徳4年 1714	1巻1冊	貝原益軒		江戸から日光	C235
京都めぐり	天明4年 1784 (享保3年 1718)	1巻1冊	貝原益軒		京都	C229
南都名所記	万延2年 1861 (宝暦4年 1754)	1巻1冊	不明		奈良	C121,314
都名所図会	天明6年 1786 (安永9年 1780)	6巻6冊	秋里籬島	竹原春朝斎	京都	C410~415, 458~463
拾遺都名所図会	天明7年 1787	4巻5冊	秋里籬島	竹原春朝斎	京都(補遺)	C14~18
大和名所図会	寛政3年 1791	6巻7冊	秋里籬島	竹原春朝斎	奈良(大和国)	C9~13, 19, 464
和泉名所図会	寛政8年 1796	4巻4冊	秋里籬島	竹原春朝斎	大坂(和泉国)	C397~400
伊勢参宮名所図会	寛政9年 1797	7巻8冊	蒔 関月		京都から伊勢	C489~494
東海道名所図会	寛政9年 1797	6巻6冊	秋里籬島	竹原春朝斎外	京都から江戸	C102~108, 510
摂津名所図会	寛政10年 1798	10巻13冊	秋里籬島	竹原春朝斎外	大坂(摂津国)	C140~142, 401
河内名所図会	享和元年 1801	1~3 6巻	秋里籬島	丹羽元国	大坂(河内国)	C286~289
唐土名勝図会	文化2年 1805	初集6巻6冊	岡田玉山	岡 熊岳	中国各都市	C295~300
木曾路名所図会	文化2年 1805	6巻7冊	秋里籬島	竹原春朝斎外	京都から江戸	C179~184, 389
松島図誌	文政4年 1821	1巻1冊	桜田 質	藤澤	奥州松島	C266, 354
江戸名所図会	天保5年 1834	7巻20冊	斉藤幸雄外	長谷川雪旦	江戸	C294, 420~427
紀伊国名所図会	天保9年 1838	3編6巻7冊	池田東籬亭外	法橋中和外	和歌山(紀伊国)	C279~285
金比羅参詣名所図会	弘化4年 1847	6巻6冊	暁 鐘成	浦川公左	大坂から金比羅	C20~25
西国三十三名所図会	嘉永6年 1853	8巻10冊	暁 鐘成	松川半山外	西国33ヶ所	C439~448

展示にあたって

江戸時代の人々は、幕府の兵農分離政策により、住居と職業を自由に変えることが禁じられていました。また自由な旅行も制限され、信仰の旅に出るにも村役人や寺の証明書（道中手形）を発行してもらわなければなりませんでした。

しかし貨幣経済の急激な進行、街道や宿場など交通手段の整備、伊勢詣りなどの流行により、いろいろな形式の「旅」が大衆化してきました。

その一方で、江戸時代とそれ以前の時代と比較して決定的な違いは、庶民生活のあらゆる分野に文字が普及してきたことでした。こうした要素が重なって各種の道中記や名所図会がもてはやされるようになりました。

中世以前にも『伊勢物語』『土佐日記』『東関紀行』などの旅行の体験記録がありますが、それらはすべて作者の内的創作欲によって書かれたものですが、江戸時代の道中記や名所図会は明らかに読者に読まれることを意識して書かれています。

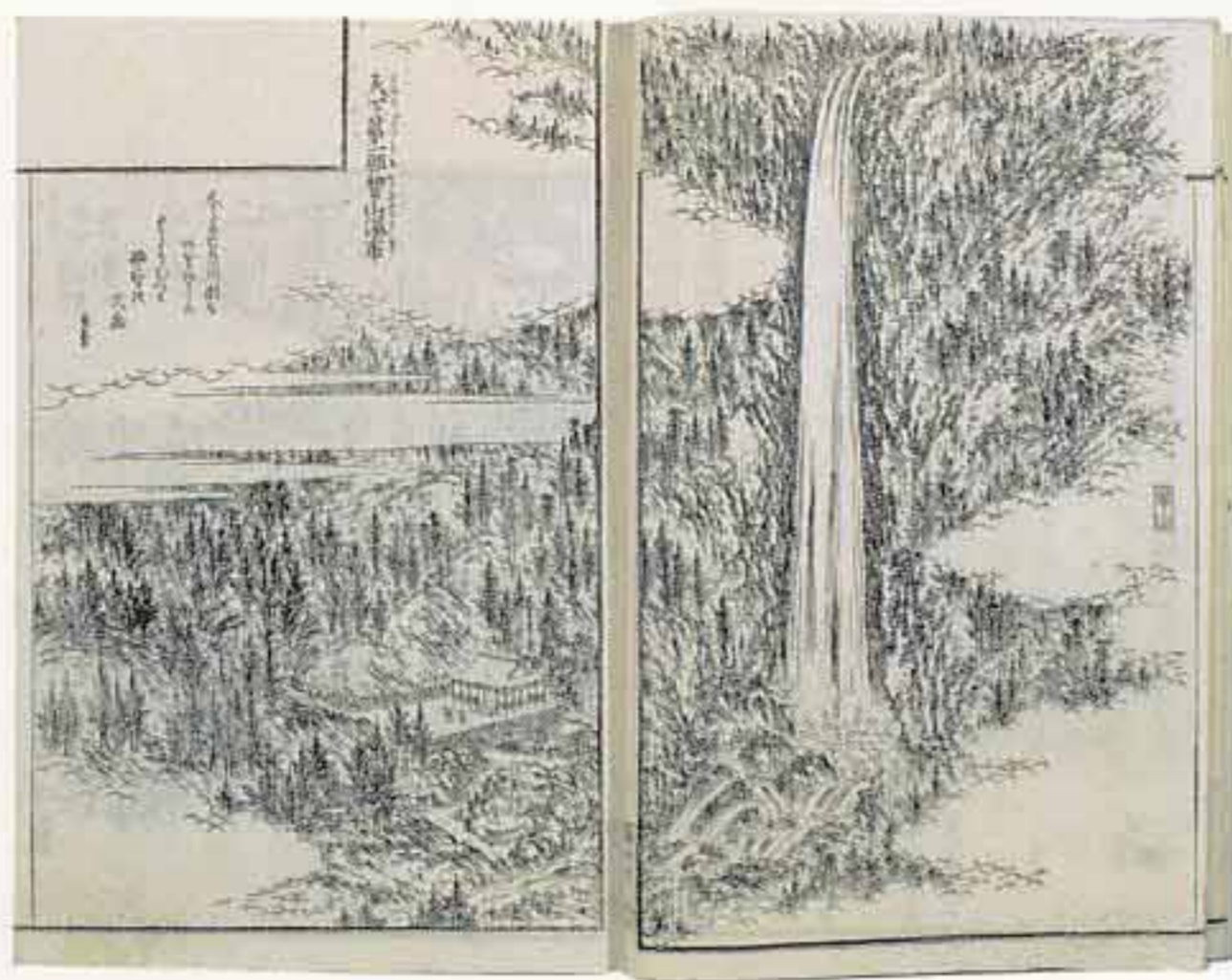
道中記の系統は『山城名所記』『東海道名所記』に始まり、ともに万治元（一六五八）年に発行されています。四国八十八か所では「霊場記」「道指南」「功德記」の四国遍路三部作が、あいついで元禄二（一六八九）年ごろに出版されました。

名所図会の系統では、安永九（一七八〇）年に『都名所図会』が出版されるや大変な評判を呼び次々と続編が出されました。また各地の名所図会が発行されるようになり『阿波名所図会』も文化八（一八一）年に出されました。

二種類の出版物の百年以上の流行のずれに、江戸庶民の旅感覚の変遷を見ることが出来ます。十七世紀中期の「道中記」は読みもので、人々が旅に憧れ各地の情報を知ろうとする要望に応えるものでありました。これに対し十八世紀末の「名所図会」は浮世絵の挿し絵が重要な意味を持つ絵画集であり、多くの人々はすでに旅を経験し折に触れて思い出の旅を懐かしむ読み物としてびったりでした。

今回の展示は、小松島市教育委員会所蔵になる膨大な西野・多田家文書のうち名所図会類を中心に企画しました。これを機会に江戸時代の旅の様子や、現代のツアーとの違いなどに触れていただければと考えています。展示に当たり、御協力いただいた小松島市教育委員会を初め多くの方々にご心よりお礼を申し上げます。

平成八年八月六日



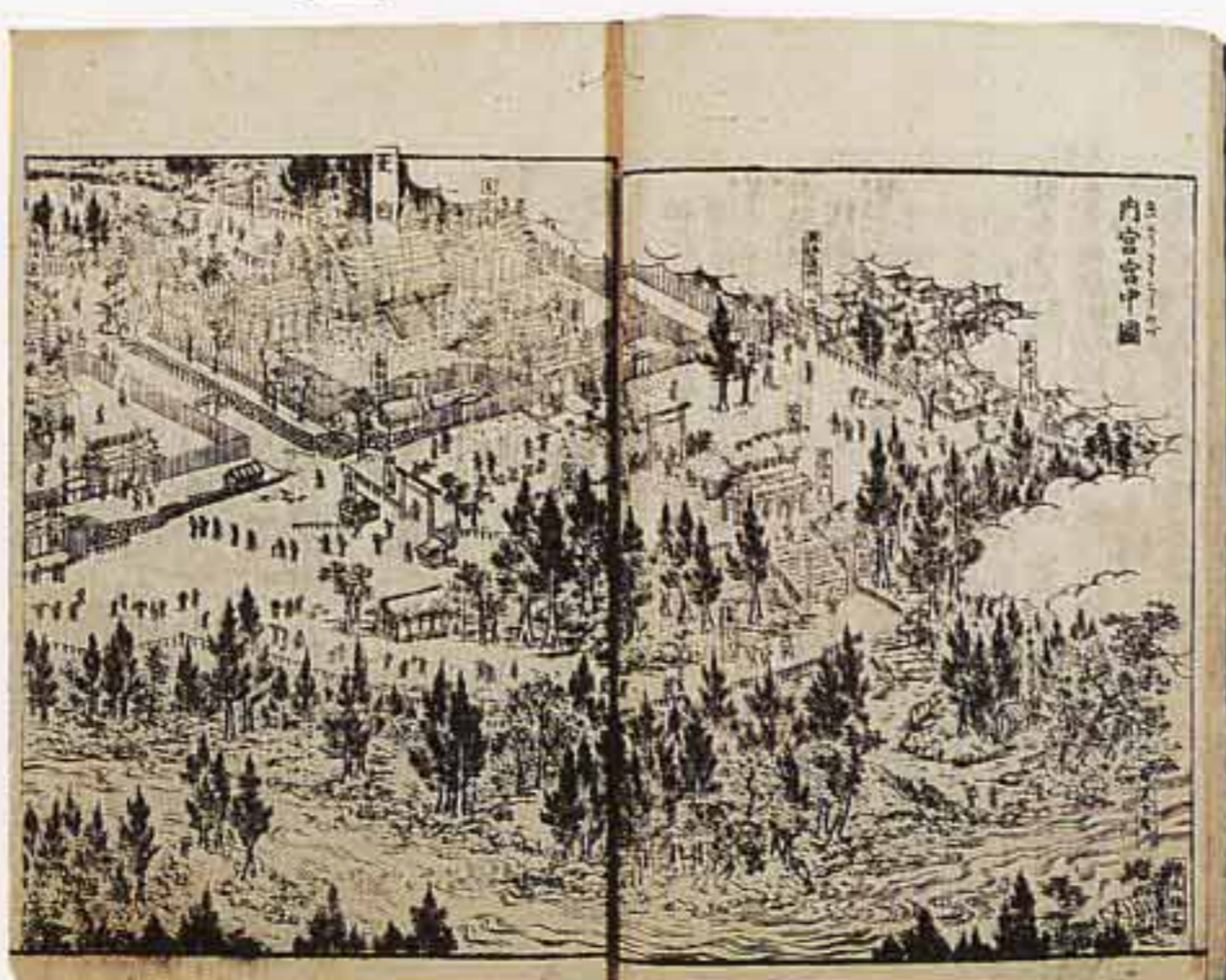
西国三十三所名所図会

那智の滝

大和名所図会



大日本道中行程細見記



伊勢参宮名所図会

伊勢神官の内宮

東海道名所図会



奈良春日の茶店



木曾路名所図会



毛皮屋(熊)



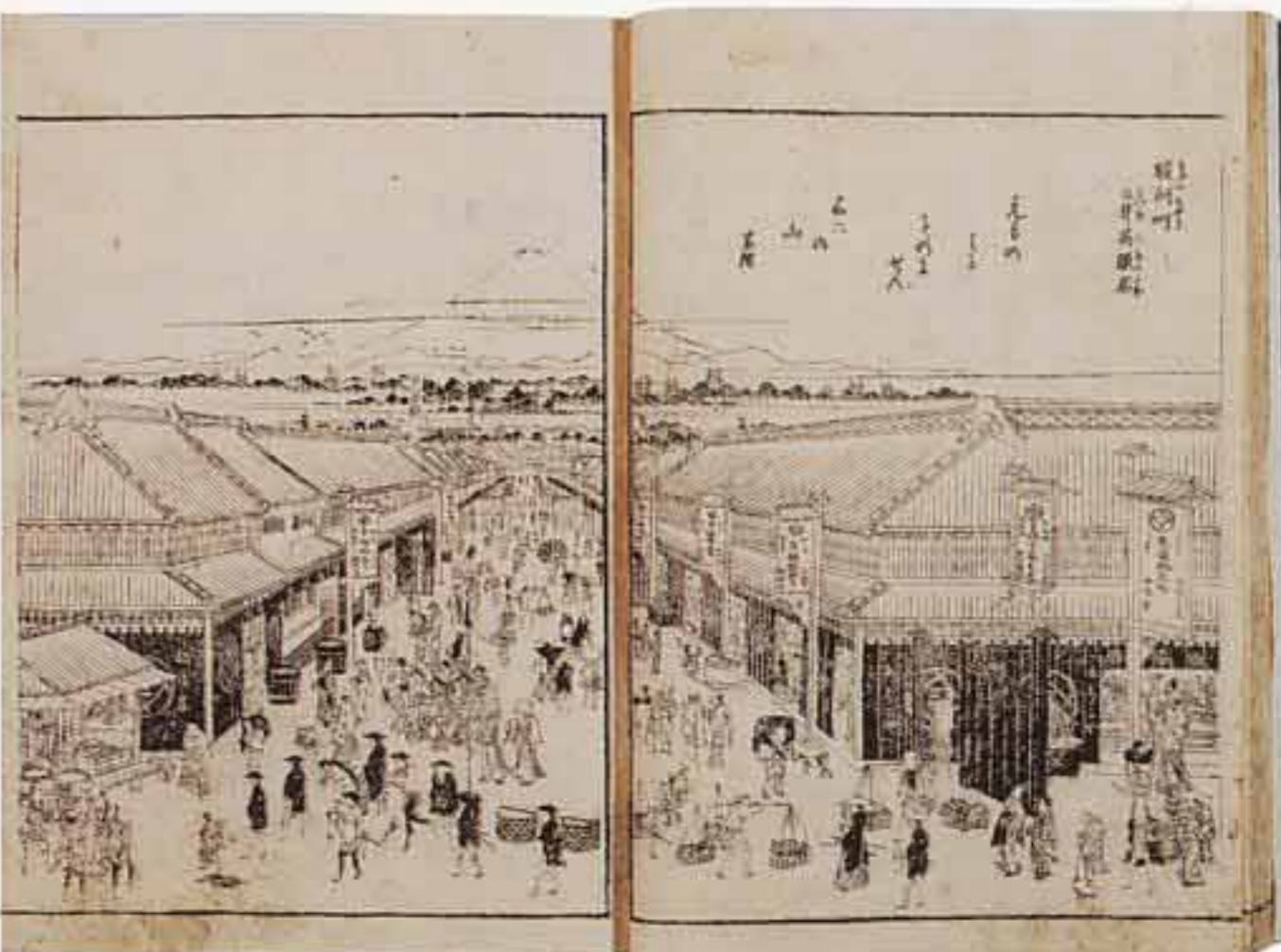
全国の 名所図会



津追分(中仙道・東海道の分岐点)

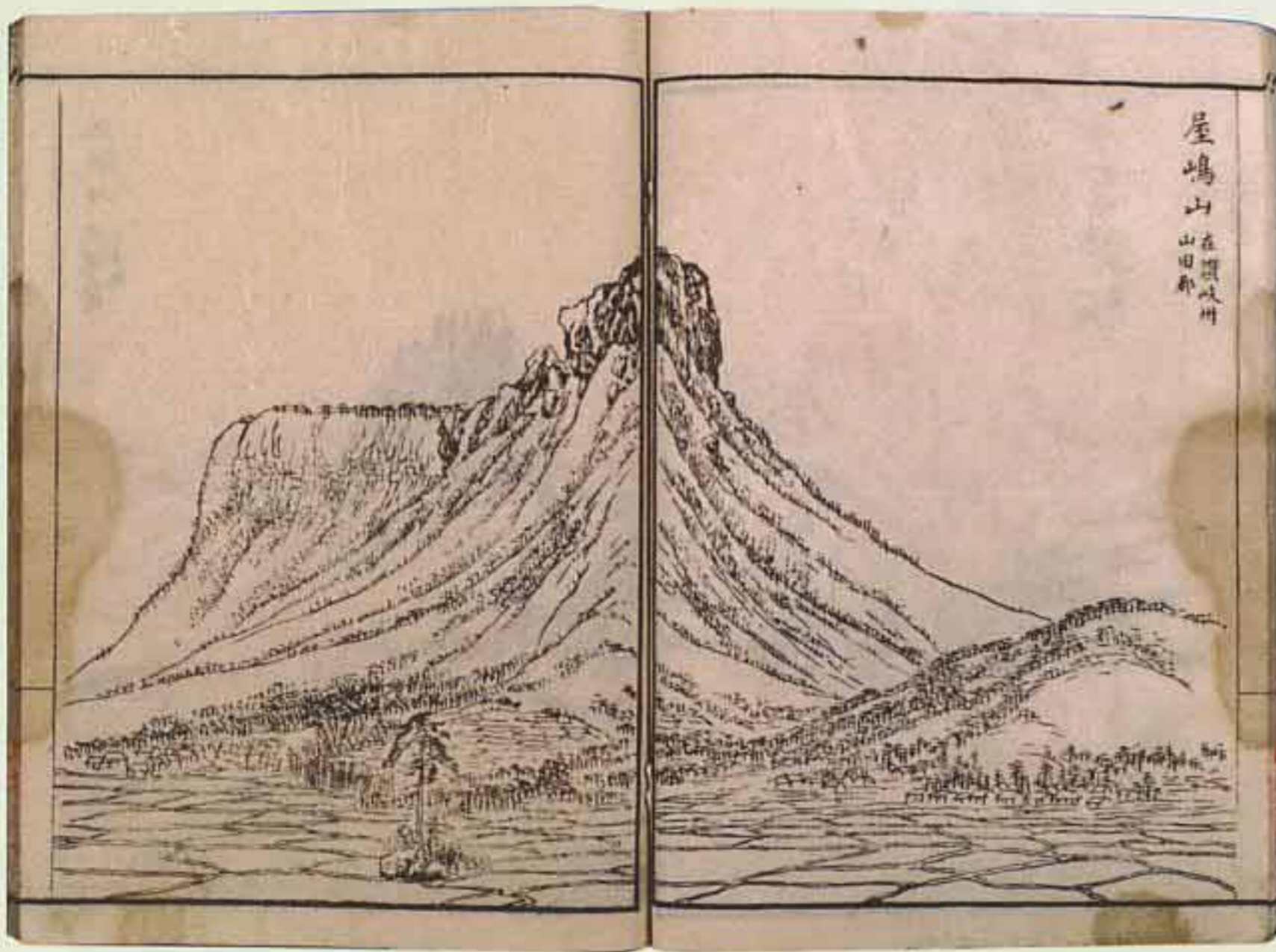


江戸名所図会



江戸駿河町(呉服店)

日本 名山図会



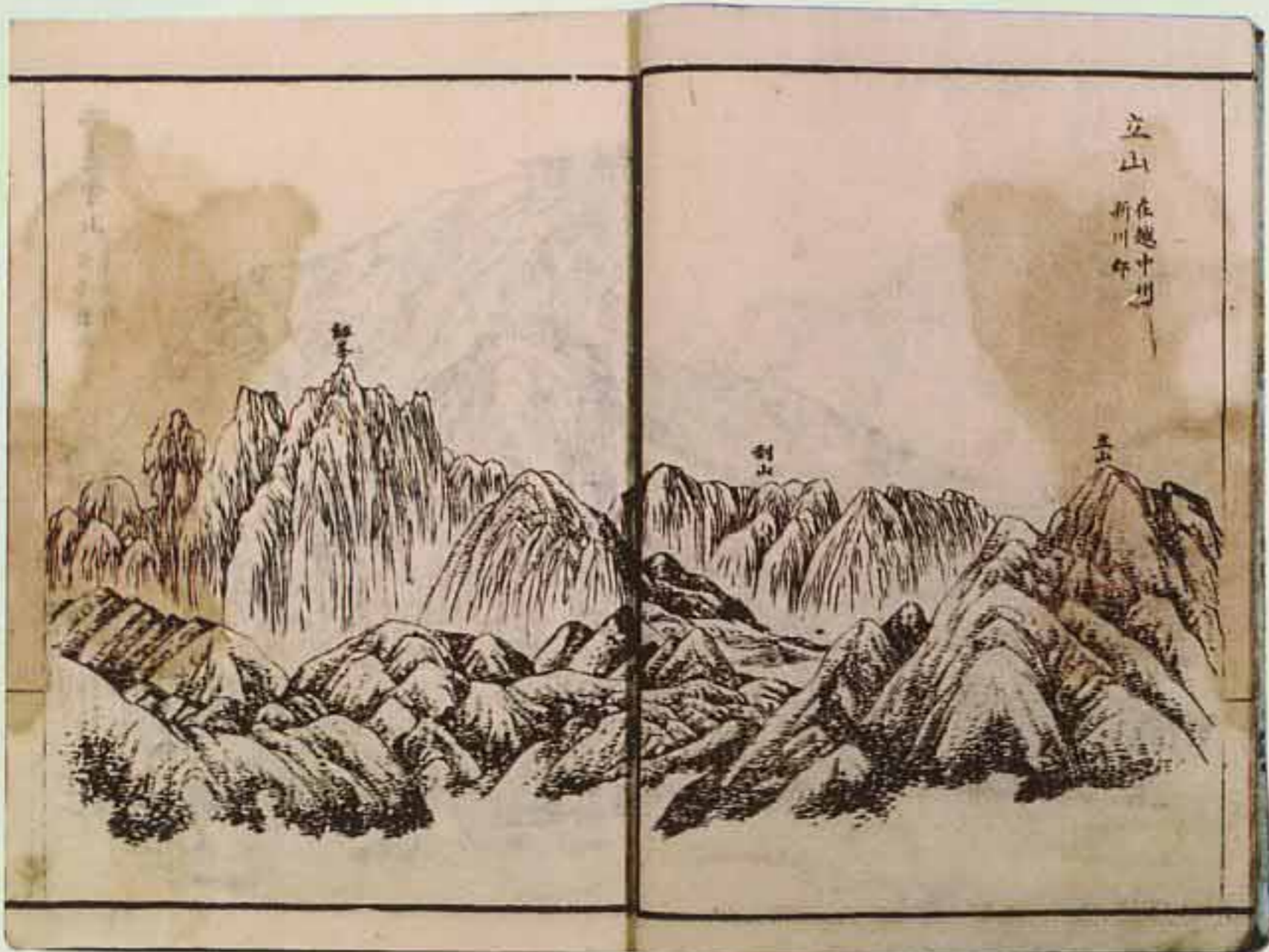
屋嶋山 在讃岐州山田郡

屋 島



五剣山 在讃岐州一本柳

五剣山



立山 在越中州新川郡

立 山

名所の由来や旅のデータなどの情報を文字と絵画で伝える各地の「名山図会」と少し違っているのが『日本名山図会』である。同書の文字情報は「六甲山 在撰津州武庫郡」といった山名と所在地だけで、写実性の高い山の絵が中心の画集である。

江戸時代の著名な文人画家の谷文晁には、蝦夷五座・九州四座を含め、全国八十九座の名山を収録した『名山図譜』（二巻）があり、その後書きを書いたのは阿波の儒学者で後に幕府の儒官に転じた柴野栗山である。それによると、奥州南部出身の医者である川村錦域は大変な山好きで、文晁に書いてもらった山の絵を部屋中に飾って眺めて楽しんでおるとあるから、錦域がスポンサーとなって『名山図譜』が出版されたのであろう。

『日本名山図会』は、『名山図譜』の普及版として文化元（一

八〇四）年秋に出版されたが、幾度も版を重ねて明治まで続いたという。展示本の出版元は、江戸七・京都二・大阪一の十書店が名を連ねているが、版によっては地方の書店も名を連ねておりロングセラーであったことを示している。

収録された山は三十四座で、深田久彌の『日本百名山』にも採用され、現代スポーツ登山の対象となる山岳もあれば、香川県五剣山や屋島のように観光の宗教的な色合いの強い山も含まれている。しかしどうしたわけか富士山が抜け落ちている。四国では讃岐の二山だけで、石鎚山も剣山も入っていない。

谷文晁の絵は、山を中心に人家・川・海・旅人などを配置し、山を浮かび上がらせており、山ばかりなのは立山の絵だけである。文晁はこの絵を描くためにすべて実地に見て歩いた。

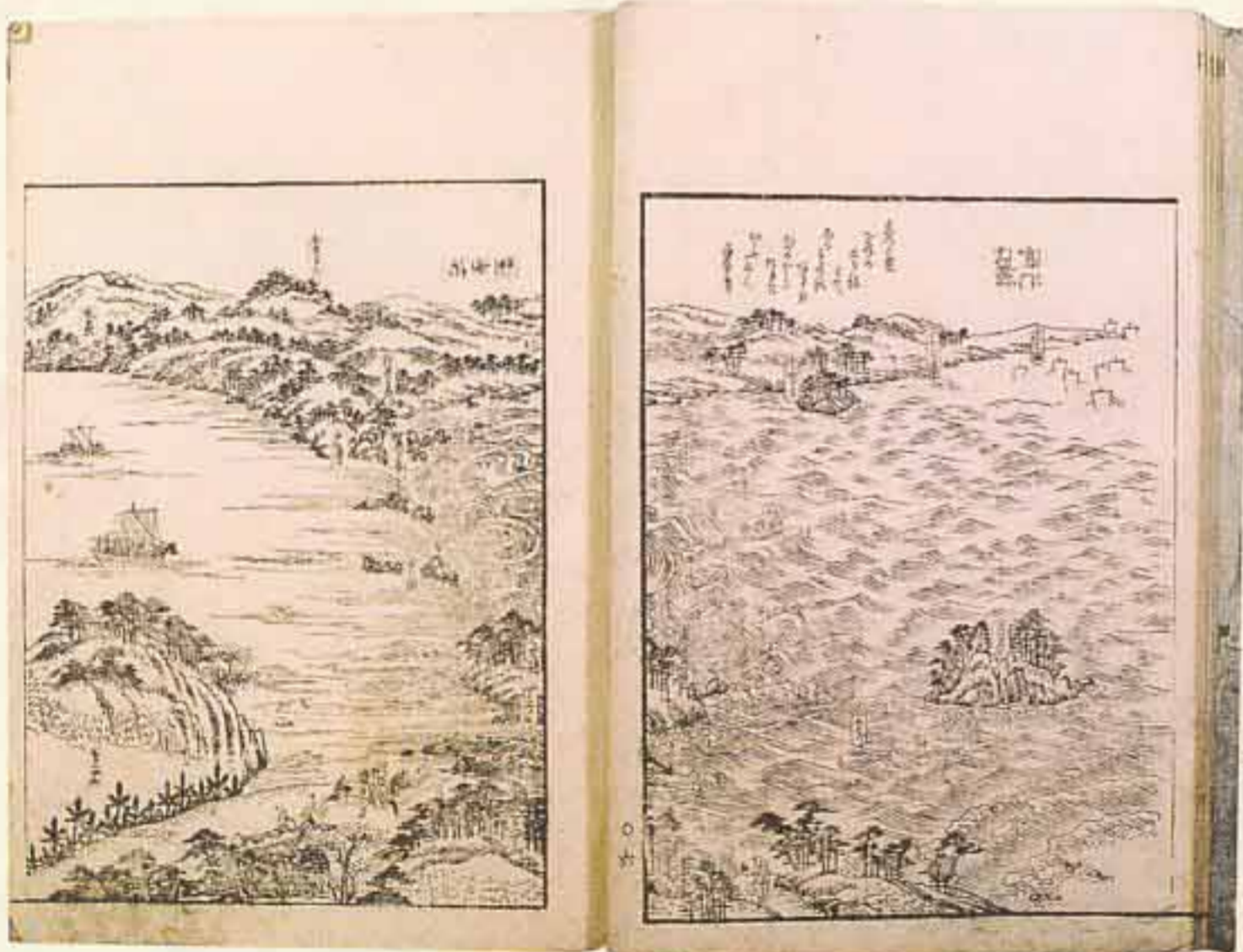
阿波名所図会

— 絵入りの阿波名勝案内 —

『四国名所図会』のうち「阿波之部」として木版刷で出版された（ただし、四国の他国は出版されなかった）。上下二冊（丁数上二十丁・下二十二丁、挿絵上十二・下十七、中版和装本）作者は探古室墨海（大坂の人）。四国遍路の折りに見た阿波の名勝を紹介している。文化八年（一八一一年）の武者小路実純序文・一寿亭亀雄跋文がある。発行（印刷所）は江戸日本橋須原屋茂兵衛ほか、書肆（書店）京都吉野屋仁兵衛等である。

上巻には、鳴門、清少納言の塚、大滝山、藍玉、櫻間池、観音寺、国分寺、焼山寺、大麻山神社、五百羅漢、雲遍寺、高越山神社、祖谷葛橋、鳴滝、土竈、岩津などが紹介され挿し絵は十二枚。

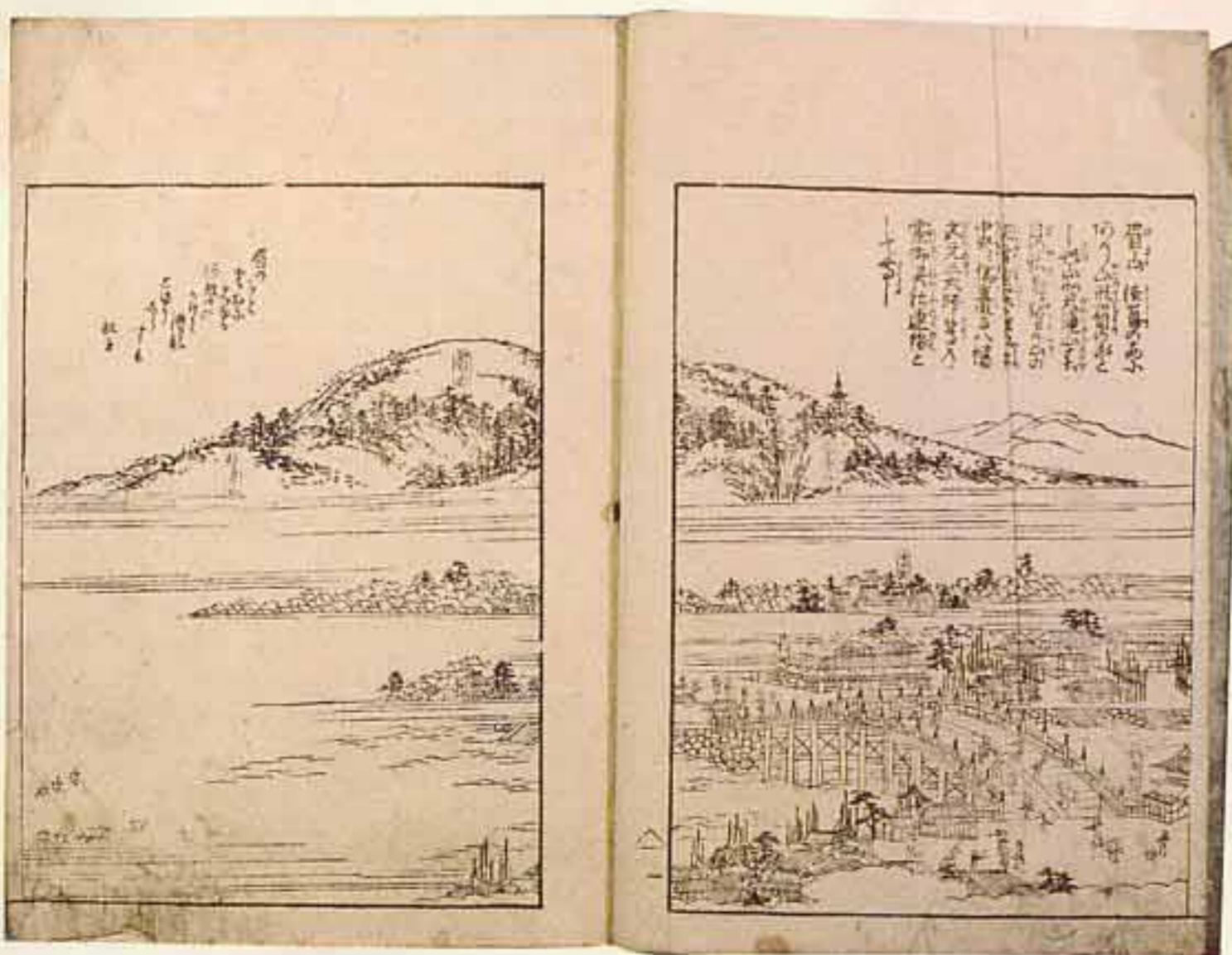
下巻には眉山、勢見山観音、竹林院、北山桜、丈六寺、小松島浦、立江寺、鶴林寺、太竜寺、薬王寺、八坂八浜、母川鰻、轟滝などが挿し絵十七枚とともに紹介されている。『阿波名所図会』の出版は、京・大坂地方、寺社・街道を除いて、一般の地方の国では、播磨・木曾について三番目である。これは当時の人々の阿波に寄せる関心の深さをあらわしているだろう。



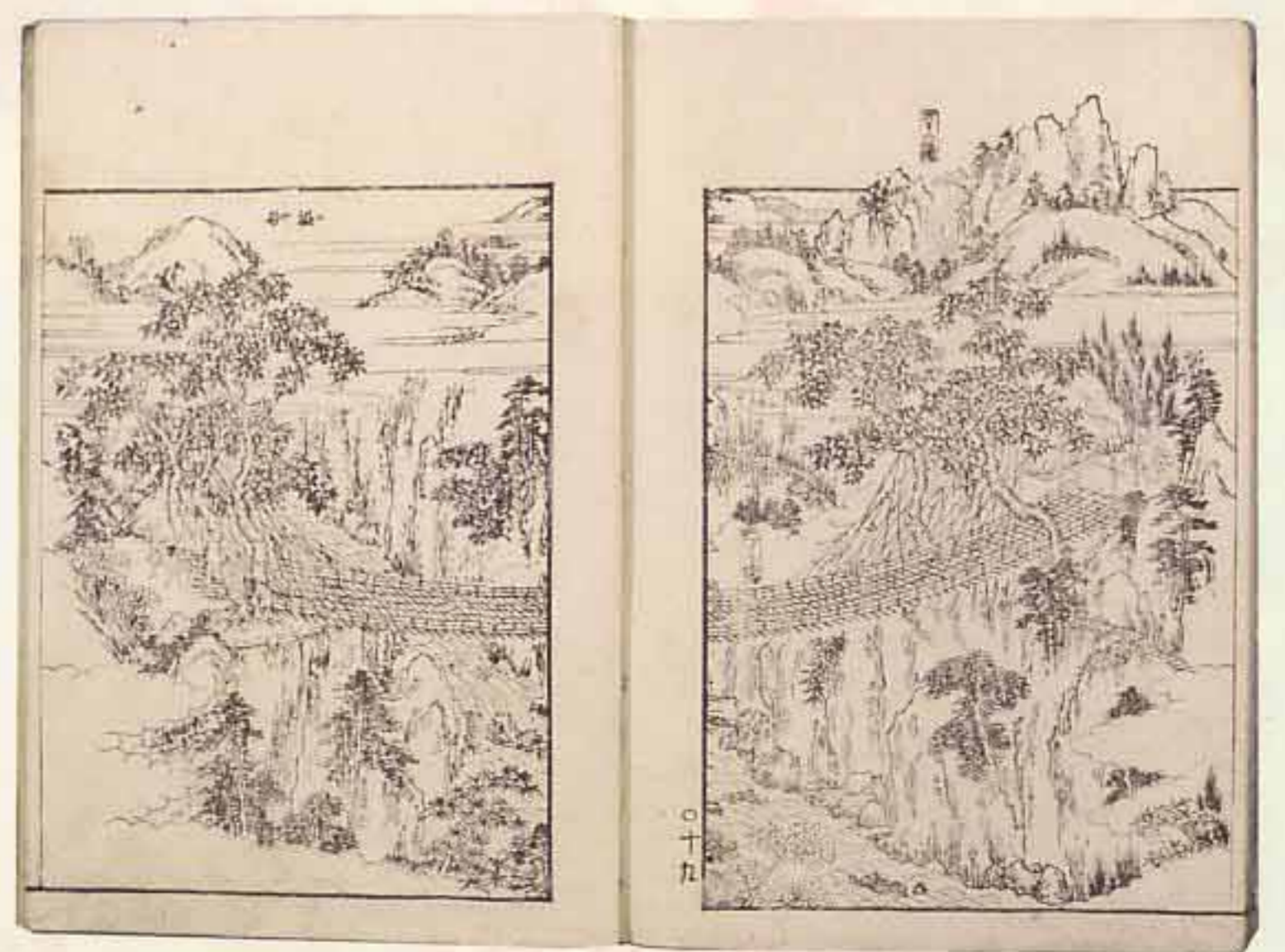
鳴門



藍玉



眉山



かずら橋

展示資料目録

番号	標 題	年 代	所 蔵	資料番号
壁面ケースA				
1	阿波名所図会	文化8年 1811	徳島県立文書館	
2	都名所図会	天明6年 1786	小松島市教育委員会	C410~415
3	拾遺都名所図会	天明7年 1787	〃	C14~18
4	撰津名所図会	寛政10年 1798	〃	C140~142
5	河内名所図会	享和元年 1801	〃	C286~289
6	和泉名所図会	寛政8年 1796	〃	C397~400
7	撰州大坂全図	弘化4年 1847	〃	C437
8	畿内近州掌覧図	慶応2年 1866	〃	C236
壁面ケースB				
9	江戸名所図会	天保5年 1834	〃	C420~427
10	横浜明細全図	慶応4年 1868	〃	C63
11	増訂武相房総海岸全図	嘉永7年 1854	〃	C64
12	江戸町内図19枚	嘉永安政年間	〃	C193~211
展示ケース1 街道の名所図会				
13	東海道名所図会	寛政9年 1797	〃	C102~108
14	木曾路名所図会	文化2年 1805	〃	C179~184
展示ケース2 巡拝と名所図会				
15	伊勢参宮名所図会	寛政9年 1797	〃	C489~494
16	金比羅参詣名所図会	弘化4年 1847	〃	C20~25
17	西国三十三所名所図会	嘉永6年 1853	〃	C439~494
展示ケース3 名所図会以前の名所記				
18	有馬湯山道記	宝永8年 1711	〃	C75
19	京都めぐり	天明4年 1784	〃	C229
20	東路之記	正徳4年 1714	〃	C235
21	身延行記	元禄17年 1704	〃	C267
22	南都名所記	万延2年 1861	〃	C121
展示ケース4 博物的な名所図会				
23	日本名山図会	文化4年 1807	〃	C135
24	唐土名所図会	文化2年 1805	〃	C295~300

※期間中展示資料を一部入れ替えることがあります。

第十二回 企画展
めいしよすえ
名所圖會の世界
—江戸後期の旅行ガイド—
平成八年八月六日 発行

編集・発行 **徳島県立文書館**
〒770 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八六(六八)三七〇〇

印刷 **原田印刷出版株式会社**
〒770 徳島市西天工町四ノ五
電話 〇八八六(三三)三三五六